1942 年 1 月 20 日　豪州・ダーウィン港外で沈没した伊 124 潜水艦から海上輸送用の暗号書が回収され、これがハワイの太平洋海軍司令部に送られて、解読チームによって研究解読され、さらに 1943 年 4 月に陸軍の海上輸送用暗号が解読されるようになり、この二つが揃うことにより海上輸送に携わる輸送船の動向は正確に把握された。

これは海軍司令部から各輸送船に対し出港時に船名、積み荷の種類、目的港、着予定時等の報告と、毎日の正午位置の報告を義務付けており、これは同士撃ちを防ぎ、安全を確保する為でしたが、米海軍はこれらを全て傍受し、海上輸送ルート付近に散開する各潜水艦に通報、待ち伏せ攻撃したのだから、多くの輸送船が海の藻屑と消え、その総数は商船 1,113 隻、戦時輸送に従事した機帆船、漁船を入れた総数は 7,240 隻、乗組員の犠牲者 60,600 人、商船乗組員の犠牲の比率は海軍軍人を大きく上廻っている。

ABCD ラインの経済封鎖打破、南方資源の確保を叫んで突入した戦争でしたが、その輸送ルートを絶ち切られ、特に石油の枯渇で動けない軍艦、飛べない飛行機では継戦能力の著しい欠如となり、焦った海軍は海上護衛総司令部を 1943 年 11 月 15 日設置を決めたが、米潜水艦はレーダーを備え、魚雷の性能も向上し、しかも的確な情報があるのだから被害は増すばかり、それでも暗号が解読されていることに気付かず、正午位置の報告を続けていたのだから情報戦では見事なまでの完敗だった。

燃料不足の苦しさのあまり戦艦伊勢をソ連に売却して、その代金で石油を購入しようとの案もでたが途中で沙汰やみになり、燃料切れの艦船は瀬戸内海で防空用の偽装網で艦姿を覆い、動けないまま終戦を迎えた。

横須賀市観音崎公園の浦賀水道を見下ろす一隅に「戦没・殉職船員追悼碑」があり、毎年追悼式が行われ、欠かさず参列して諸先輩の無念を慰霊しています。

終戦後、アメリカ調査団が来日し軍事関係の調査をしたことがあるが、その際海軍暗号はどうにか解読できた。ところが陸軍の暗号はどうしても解読できなかたので暗号機を特に綿密に調査したことがある。

我国はインテリジェンス(情報活動)に対する感覚は明らかに遅れていたが、陸軍と海軍を比べれると海軍の方が甘かったようで海軍の情報は筒抜けだった。

陸軍は憲兵隊が防諜に取り組んでおり、さすがのアメリカの諜報機関も陸軍の暗号解読には手こずったことを戦後公表している。

太平洋戦争が完敗に終わった原因を元軍関係者に尋ねると、海軍関係者が必ず挙げるのが、レーダーと VT 信管で、この二題を解説する。

レーダー：1925 年東北大学の八木研究室でコイルの共振の実験をしていると、アンテナの前に波長の半分より少し短い長さの導体を置くとその方向に指向性が高くなる現象で、この現象を「電波指向方式」とし、1928 年東北帝大八木秀次教授が発表してた電波の指向性を良く利用できるアンテナ理論を確立、これを実用的に改良したのが宇田講師で、八木-宇田アンテナとして特許を取っているが、日本国内では学会も電子機器メーカー、陸海軍部も応用するところがなくそのまま放置していた。